# 「１億」に違和感

表題と写真は中日新聞 10 月 9 日「特報」である。リードから―第三次安倍改造内閣が始動した。掲げたスローガンは「一億総活躍社会」。新たな経済政策の総称というが、ネット上では「大きなお世話」「上から目線」という批判の声も。「一億〇×」で思い浮かぶのは、戦争にちなんだ標語が多い。多様な生き方の時代に、「なぜ一億なのか」と疑問も膨らむ。

「1億総活躍社会」

「1億」に違和感

戦争を連想…なぜ？

多様化社会…なぜ？

にじむ政権の思想

特報

当時、標語とともに歌のタイトルや歌詞にも「一億」は頻繁に登場した。近現代史研究者の辻田真佐憲さんによると、40 年発売の「起てよ一億」をはじめ、「出せ一億の底力」（41 年）、「一億特攻隊の歌」（45 年）など目白押し。辻田さんは「30 年代に人口が約 1 億人になり、戦争に突入していく 40 年代ごろから、国民を一致団結させるため盛んに使われた」と説明する。「こうした歌はラジオで流されたほか、学校や勤労動員先で繰り返し歌われ、当時の国民に刷り込まれていった」

ただ「一億」という数字は歴史的な問題を抱えている。当時、現在の日本に当たる部分の人口は約 7 千万人。「一億」人は朝鮮半島や中国の租借地、南洋諸島など「大日本帝国」全体の人口だった。辻田さんは「戦前から『一億何とか』は単なる数字ではなく、多様性を無視したスローガンだった。戦後まもなく、政権が『一億総懺悔』を唱えたが、それも植民地の人々まで含めた数字で実態とずれている」。現在の人口 1 億 2700 万人との開きも無視できない。「首相が歴史的な経緯を顧みず、現在も『一億』を標語に使うのは乱暴。言葉を軽んじているととられても仕方がない」と批判する。

名古屋外国語大の高瀬淳一教授（情報政治学）は「深く考えずに使ったのではないか」とみる。国民の目を安保法から経済に向けさせるためのもので、明るい未来をイメージして「一億総活躍」を押し出したのではないかと推測する。「ここでいう『活躍』とは、つまり『働け』という意味。前回、『女性活躍』という言い方で女性の反発を受けたため、『一億総』に言い換えたのでは」

国民を挑発するような表現を選ぶ点に安倍政権の不安が出ているとみるのは香山リカさん。「安保法に対する反対運動が予想外に盛り上がったため、あえて強気の発言で自己確認をしている。おびえのあらわれではないか」

（2015 年 10 月 13 日）